

『地域研究のためのフィールド活用現地語教育』

平成 23 年度派遣報告書

—ボツワナ共和国・ボツワナ大学, ツワナ語, 派遣期間 H23. 9. 20-H24. 3. 14—

平成 23 年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程 1 回生
佐藤 千景

自身の研究テーマについて

本研究ではボツワナ北西部における漁撈活動と漁撈規制をめぐる諸問題について取りあげる。南部アフリカの内陸部に位置するボツワナ共和国は国土の約 3 分の 2 がカラハリ砂漠で覆われた乾燥地帯であるが、北西部には世界最大級の内陸デルタ（オカヴァンゴデルタ）が広がる。研修者が調査対象とするオカヴァンゴデルタ北部パンハンドル地域では、南北に流れるオカヴァンゴ川に沿って村々が点在し、人々は複数の生業を組み合わせながら変化の大きい自然環境に対応している。その中でも漁労活動は地域住民の蛋白質供給源や現金獲得手段となる重要な生業活動の 1 つである。

2008 年には漁撈活動に関する新たな法律が定められ、毎年の禁漁期間が定められた。この法律では、禁漁期間中にすべての漁撈活動が禁止されている。この漁撈規制の施行後、禁漁期間の設置による地域住民への影響は詳細に明らかにされておらず、漁撈資源保護への評価も定められていない。パンハンドル地域は国境沿いに位置することから国境を越えた人々の移動も多く、近年は観光業も発達し始めている。自然保護政策や観光業と人々の生活をどのように連関させて持続的に行っていくかを考える上で、オカヴァンゴデルタの自然環境に依拠する地元の人々の生活や文化に密着したローカルな視点は不可欠である。本研究では漁撈規制をめぐる諸問題について検討していくと共に、地域住民の生活の実態を詳細に明らかにしていく。

研修言語の概要

研修言語であるツワナ語はニジェール・コンゴ語族、バントゥー語派に属し、ボツワナにおいて人口の 80% が話す国語である。ツワナ語は南アフリカ共和国、ジンバブウェ、ナミビアの一部の地域にも話者がいる。ボツワナにおいてツワナ語は公用語である英語と共に諸民族間の共通語として広く使われているため研究を行う上で有用な言語である。

研修内容

研修の内容としては講義と実践の 2 段階に分けられる。研修期間前半に行った首都ハボロネでの講義はボツワナ大学人文学部アフリカ言語・文学科に所属する講師 1 人と生徒 2 人の個人授業体制で行われた。平日 1~2 時間、計 45 時間の講義では基本的な挨拶、単語の暗記から始め、時制などの文法事項を学んでいった。決まった教科書は無く毎回講師の説明で授業は進められた。講師は小学生用の絵本を使って発音の練習や覚えた単語の確認をしてくれた。講義以外の場ではテレビのツワナ語ニュースを見る

ことで新しい単語の収集に努めた。またコンビ（ミニバス）の中で人々の会話を聞くことでツワナ語に慣れるように心がけた。

実践の段階ではボツワナ北西部に移動し観光の拠点の町であるマウンやパンハンドル地域の村に滞在した。マウンではツワナ人の家に滞在したのでツワナ語に触れる機会が格段に増え、友人同士のツワナ語会話やツワナ語の歌、映画から単語や表現を学んだ。パンハンドル地域の村には多数の民族が暮らしており、各民族の言語が日常生活において話されていた。とりわけブクシュ語はパンハンドル地域の主要民族であるブクシュの人々の間で使われており、ツワナ語よりも頻繁に耳にした。村に滞在した際には、ツワナ語だけでなくブクシュ語の単語も村人から学んだ。



写真1：授業風景



写真2：友人と授業の復習

印象に残った体験や経験

オカヴァンゴ川東部の村へのアクセスには朝6時から夕方6時まで運行する無料の公用フェリーを使って川を渡る必要がある。フェリー乗り場には川を行き来する人々、飴や揚げドーナツ、果物、タバコなどを並べて売る人々がいた。車が無い村人にとって、幹線道路が整備されておらず公共交通機関が存在しない東部の村と、幹線道路が整備されて公共バスが走る西部の主要な村への行き来は時間的にも体力的にも消耗する。多くの村人と同様に車が無かった私もその苦労を体感することになった。それと引き換えに、人々の溢れるフェリー乗り場では新鮮な出来事を楽しむ機会に恵まれた。フェリーの操縦席に座り、川にいるカバやワニを見つけて観察し、川を渡ろうとする車の運転手に毎回行き先を訪ね、人々と会話し、言葉も教えてもらった。フェリー乗り場で人々と交流することで新しい発見が得られたし、現地の言葉を勉強する意欲も増したように感じる。



写真3：川を渡るフェリー



写真4：果物売りを手伝う子供たち

目標の達成度&反省点

ツワナ語の初歩は身につけられたものの、会話技術の習得という当初の目標を達成できたとは言い難い。ハボロネでは日常生活の場において公用語である英語が通用したので講義以外の場でツワナ語を実践する機会はあまり無かった。そのため、ハボロネから離れ北部の田舎の村々を訪れた際に英語を話せない村人との会話に苦勞した。ジェスチャーを交えて一問一答の簡単な質問はできるものの、それ以上は英語を話せる村人の通訳に頼ってしまう部分が多かった。現時点では言葉のみに頼らず村人とコミュニケーションをとることも重要であるが、実践の段階になって二か月分の集中的な受講だけでは現場の調査には不十分であり、今後も継続的に現場で学習を継続する必要があると強く感じた。

また、調査地域で日常的に話されるブクシュ語も今後学ぶ必要がある。人々との会話の中で、現地の言葉を理解できたならば得られた情報を逃してしまったことが大きな反省点である。